

# 次の時代の予感

藤田千彩 (アーティスト)

ぱっと見、イラストレーションやマンガにしか見えない、

売るためのものを「アート」と呼ぶべきなのか。

アートバブルで流行した作品は、そういった作品が多く、高い値段をつけて売れていった。

売れるものが良い作品、と言わんばかりに、奈良美智や村上隆のような

かわいらしくポップな「アート」が流行した。

ある日私は、ヨコイファインアートの事務所スペースでファイルを見ていた。

おそらく誰もが一度は「アートってすごい」と涙を流した経験があるだろう。

しかしこの数年、アートバブルで増殖した作品の多くに対して、

そういった感覚を抱くことはほとんどなかった。

そんな時代がやっと終わった、とためいきをつきながらファイルをめくる。

心を揺さぶられるアートを再び見たい、と切に願う。

一通り見ると「前田さつきの新作があるので見てください」と言われた。

またどうせイラストレーションやマンガのようなものでしょう？

ファイルでは正直言ってそんな印象しか持てなかった。

ギャラリースペースに移動すると、畳一畳分はあろうかという大きなキャンバスが、

壁に一枚だけ立てかけられていた。

「これ、ですか？」

《刻印》というタイトルの作品には、

刺青の入った背中をのけぞらせた女性の裸体像が描かれていた。

障子を開けると女性が横たわっていた、というようなシチュエーション。

堂々とした女性の背中からは、あふれる欲望と同時に心の影も感じ取れる。

男性の視点かもしれないが、女性らしいおやかさがただよう。

なまめかしく魅惑的な美しい世界は、刻み込まれた線の多さや細密さから生まれていた。

こんなに大きい作品だったとは、こんなにリアルな感情をつかまされるとは。

ファイルでイラストレーションやマンガにしか見えなかったのに、

この美しさや細やかさは、実際見ないことには分からない。

美しさの源である「線」は、文章を書く私も使う普通のボールペンで生み出されていた。

「マンガ家になりたかった少女時代から、

ボールペンや漫画を描くためのペンは使い慣れている」と前田さつきは言った。

イラストレーションやマンガのように見えるのは、

そういった経験から生まれたものだからに違いない。

無表情の真っ白い画面から、完成に至るまで、どのくらい労力が掛かっているのだろう。

「日中はキャンバスに向かい、寝る前は小さな紙に、

毎日10時間ほど描いています」という彼女。

執拗とも思える手の動きが、今日も前田さつきを支えている。

売れるものが良いもの、という時代は終わった。

売れるだけではなく、高い技術やアートでしか味わえない感動を与える作品が良いもの、ということを実証する時代がはじまった。

今日も前田さつきは、6畳のアトリエいっぱいの大きさのキャンバスを机に平たく置き、ボールペンを動かしていることだろう。

アートにしかできないことを知らしめるために、そして次の時代をつくるために。